

令和2年度中野区学力にかかわる調査の結果について

1 調査の趣旨

- 各学校において、自校の児童・生徒一人ひとりの学習状況を踏まえて、教育課程や指導の改善・充実を図る。
- 調査の結果を基に、児童・生徒自身が学習上の課題を認識し、その後の学習に役立てる。
- 各教科の目標や内容に照らした学習の実施状況を把握し、区内小・中学校における教育課程の実施状況についての課題を明らかにして教育委員会の施策及び事業に生かす。

2 調査の実施概要

(1) 対象学年及び教科 ※ 調査範囲は前年度の学習範囲

学年	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
対象人数(人)	1,732	1,620	1,555	1,616	1,499	1,033	985	936
国語	○	○	○	○	○	○	○	○
社会					○	○	○	○
算数・数学	○	○	○	○	○	○	○	○
理科					○	○	○	○
英語							○	○

(2) 実施方法 ペーパーテスト形式による調査

(3) 実施時期 令和2年9月8日～11日の中で1日(行事の予定があった北中野中のみ9月2日)

3 調査の方法・内容

- (1) 本調査では、学習指導要領の目標、内容の学習状況を把握するため、教科の観点ごとに問題を作成した。
- (2) 出題した学習内容や問題の形式、難易度等を考慮し、「おおむね満足である状況」を示す数値(目標値)をあらかじめ目標として設置した。この目標値に到達した児童・生徒の割合(通過率)を基に、学習状況の把握に努めた。
※本調査では、通過率が70%であれば、区内の70%の児童・生徒が、「おおむね満足できる状況」にあることを示しており、全ての教科の各観点の通過率を70%以上を目指すことを目指している。

4 調査結果の概要

- (1) 小学校・中学校ともに、全学年・全教科の平均正答率は、目標値と同程度もしくは目標値を上回っていた。
- (2) 通過率が70%以上の項目は、全86項目中62項目で、昨年度、一昨年度に比べ達成した項目数が増加した。教科ごとに見ると、国語は32項目中28項目(昨年度は22項目)、算数・数学は24項目中21項目(昨年度20項目)、英語は6項目中6項目(昨年度は3項目)となった。

年 度	平成30年度	平成31年度	令和2年度
項目数(全86項目)	57	48	62
項目数の割合(%)	66.3	55.8	72.1

(3) 課題

全教科共通して、複数の資料を比べたり関連付けて考えたことを記述する問題、理科においては事象や実験・観察の結果を基に考察し自分の言葉で表現する問題の正答率が低く、無解答率も高いという傾向が引き続き課題として見られる。

また、語句や用語の意味の正しい理解や活用にも課題が見られる。語句や用語を覚えるだけでなく、意味の理解を深めて定着を図り、それらを活用して表現する力を育成する必要がある。

5 目標と今後の対応

- (1) 本調査は全ての項目で通過率70%を達成することを目標としている。「新しい中野をつくる10か年計画」(平成28年4月、中野区)では、経過目標として以下の成果指標と目標値を示した。

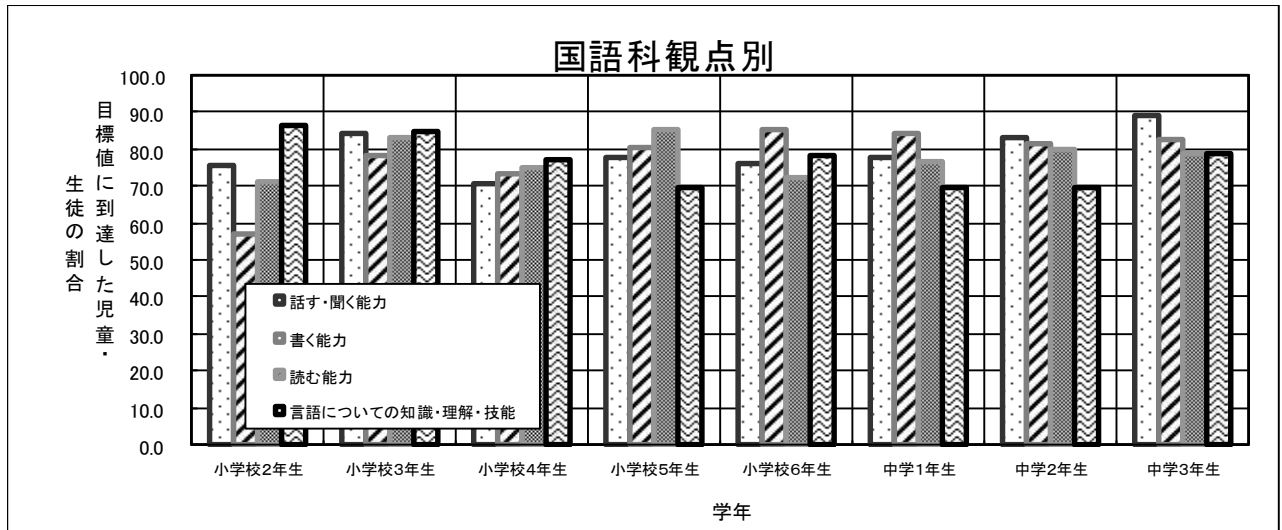
年 度	平成26年度実績	平成32(令和2)年度	平成37(令和7)年度
項目数(全86項目)	38	61	69
項目数の割合(%)	44.2	70	80

本年度は62項目が通過率70%に達しており、平成32(令和2)年度の経過目標を達成することができた。今後は、達成できていない項目についての分析を進め、平成37(令和7)年度の経過目標達成に向けて取組を継続する。

- (2) 区全体の調査結果は教育委員会事務局で更に分析を進め、中野区教育委員会ホームページ上で公開する。なお、小・中学校に共通する課題についても検討し、その解決策を研修会等で提示する。
- (3) 各学校においては自校の結果についての分析を行い、授業改善に活かす。授業改善の視点として、任期付短時間勤務教員の活用、「主体的・対話的で深い学び」の実現、1人1台端末を生かした児童・生徒一人ひとりの状況に応じた学習の展開等が挙げられる。併せて、分析結果等を、各学校のホームページ等にて公開する。特に、通過率が70%に届かなかった観点については、具体的な取組を講じていく。
- (4) 教育委員会は、教員研修、特に若手教員育成研修の充実に努め、教員の授業力の向上を図る。

6 調査結果

(1) 国語科



【調査結果の分析】⇒「社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付け、感じたり想像したりしたことを伝え合う力の育成」

◆結果

- ・どの観点も、目標値に到達した児童・生徒が70%に達している学年が多く見られ、小学校3年生、4年生、6年生、中学校3年生では、全ての観点で目標値に達した児童・生徒の割合が70%を超えた。
- ・「話す・聞く力」「読む力」については、小学校2年生から6年生、中学校全学年において、目標値に到達した児童・生徒の割合は70%を超えている。区全体として「話す・聞く力」「読む力」が、身に付いてきていることがうかがえる。
- ・「書く力」については、小学校3年生から6年生、中学校全学年において、目標値に到達した生徒の割合は70%を超えている。区全体として「書く力」が、身に付いてきていることがうかがえる。
- ・「言語についての知識・理解・技能」については、主語と述語、修飾と被修飾との関係についての正答率が低い。また、言語についての知識・理解は、小学校5年生、中学校1年生、2年生で70%を下回っている。

◆課題

- ・新型コロナウイルス感染症対応による臨時休業等で時数確保が難しい中であるが、語彙を豊かにするために漢字や言葉の定着の時間を確保するとともに、学習したことを繰り返し活用するような学習に取り組んでいくことが必要である。
- ・「書くこと」に関する無解答が、多くの学年で10%を超えていた。書くことへの抵抗感をなくすよう低学年から段階的に指導をしたり、資料等を活用し目的や意図、条件に応じて書く指導をしたりするなどの指導改善が必要である。
- ・「読むこと」については、文章全体の構成を捉えて要旨を把握する力を身に付けさせ、文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめていくことが必要である。

◆課題への対応

- ・語彙指導の改善・充実に向け、語句と語句との関係、語句の構成や変化などへの理解を通して、語句の意味や使い方に対する認識を深め、語彙の質を高めていくとともに、漸次習った漢字を書いたり、文や文章の中で使ったりすることができるよう、家庭学習と関連付けたり、他教科の中でも積極的に習った漢字や語句を使ったりするよう指導する。
- ・「書くこと」については、小学校低学年から書くことに対する抵抗感をなくすよう、系統的・段階的に指導を進めることが求められる。また、日常的に子どもたちの書きたいという意欲を高めたり、相手や目的を意識して、経験したことや想像したことの中から書きたいことを決めて文章を書いたりする体験を継続的にさせることが必要である。
- ・事実と感想、意見などの関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を把握し、自分の考えをまとめることができる学習活動を取り入れる。また、児童・生徒の考えをICTを活用して可視化し、それを手がかりとして話し合ったり、文章にまとめたりして、意見や感想を共有し、自分の考えを広げる活動を取り入れる。

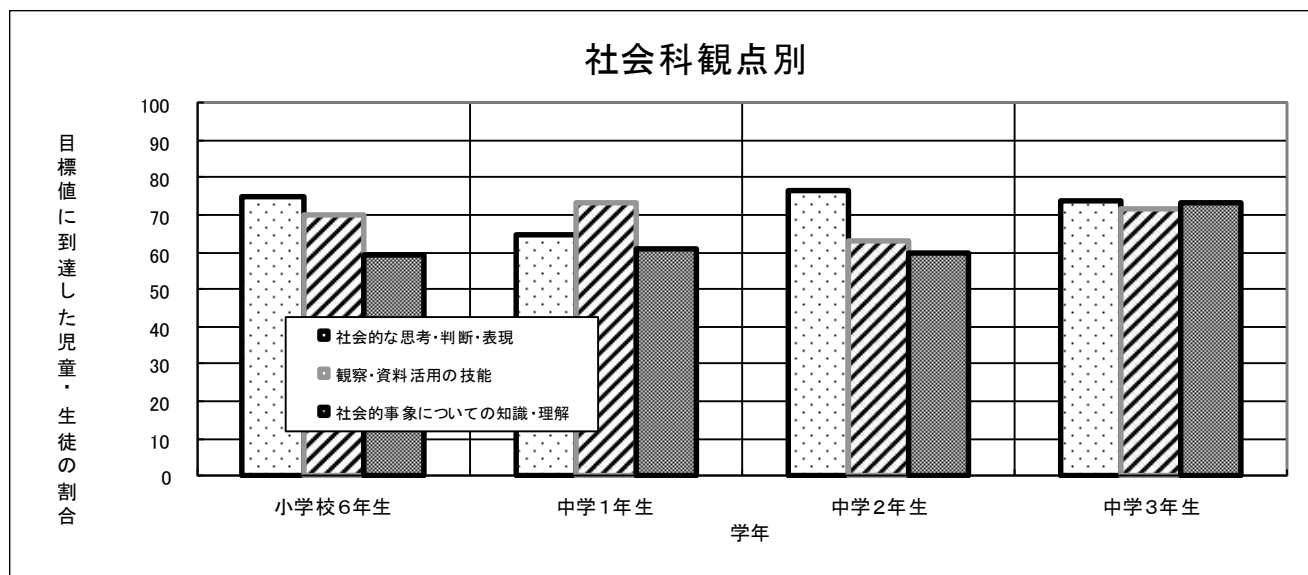
【参考】

年度	話す・聞く力			書く力			読む力			言語についての知識・理解・技能			
	H30	H31	R2	H30	H31	R2	H30	H31	R2	H30	H31	R2	
小学校	2年生	72.2	72.0	75.5	51.9	55.6	57.0	59.5	59.4	71.1	80.5	80.8	86.2
	3年生	74.0	71.1	84.4	68.1	66.9	78.2	75.9	74.9	83.3	83.3	84.7	84.8
	4年生	63.2	61.7	70.4	64.3	64.7	73.6	70.7	68.4	75.2	70.0	69.4	77.0
	5年生	74.8	71.5	77.8	76.0	76.3	80.3	84.7	81.2	85.5	74.7	72.2	69.8
	6年生	73.8	73.1	76.3	83.9	81.2	85.1	70.0	68.5	72.2	78.4	79.0	78.5
中学校	1年生	66.5	64.4	77.5	75.9	77.0	84.2	69.9	72.4	76.4	67.5	70.3	69.8
	2年生	81.4	75.0	83.1	78.7	79.5	81.6	77.9	75.2	79.8	64.7	62.5	69.4
	3年生	87.0	88.4	89.1	79.4	76.0	82.4	74.7	72.5	78.9	74.6	72.6	79.0

※ 太字・斜体は、平成31年度を上回ったものを示している。

※ 網掛けの数値は目標値に到達した児童・生徒が70%以上の項目を示している。

(2) 社会科



【調査結果の分析】⇒「社会的な事象について汎用的な知識を習得し、多面的・多角的に考察する力の育成」

◆結果

- ・「社会的な思考・判断・表現」「観察・資料活用 of 技能」は、どの学年も昨年度の結果を上回った。特に顕著なものとして、「社会的な思考・判断・表現」では、中学2年生が5.6ポイント、中学3年生が4.6ポイント上昇した。また、「観察・資料活用 of 技能」では、中学1年生が3.9ポイント、中学3年生が4.9ポイント上昇した。
- 一方、「社会的な事象についての知識・理解」では、中学1年生は0.7ポイント、中学3年生は6.2ポイントの上昇が見られたが、小学6年生は3ポイント、中学2年生は2ポイント減少した。
- ・【領域別達成率で65%未満のもの】
 - 小学6年生：「農業や水産業」64.6%、「工業生産」59.9%
 - 中学1年生：「我が国の農業や水産業」45.0%、
 - 中学2年生：「世界の諸地域」57.1%、「古代までの日本」58.2%、「中世の日本」64.4%
 - 中学3年生：「日本の地域構成」61.0%、「日本の諸地域」62.2%、

◆課題

- ・結果から、小学6年生から中学3年生まで継続して課題となっている領域が2つあることが分かる。一つが「国内の産業の現状や動向」、もう一つが「世界と日本の地域構成」である。地理的分野においては、単に地理的な重要語句を詰め込む学習ではなく、資料を活用して情報を関連付けて理解する学習が必要である。

◆課題への対応

- ・「国内の産業の現状や動向」と「世界と日本の地域構成」の学習では、児童・生徒が我が国の国土の様子を捉え、産業の種類や盛んな地域、輸入など外国との関わり等について関連付けてまとめられる展開にする。その際、地図帳(地図)、地球儀、衛星写真等の活用を通して、社会的な事象について、位置や空間的な広がりなどを考えながら地図上で捉えられるようにする。
- ・用語・語句などを含めた個別の事実等に関する知識の詰め込み型の学習にならないよう、学んだことを生かして自分の言葉でまとめるなど、社会の中で汎用的に使うことのできる概念等に関わる知識を習得できるようにする。
- ・児童・生徒が、ICTを活用して調べまとめたり、資料を重ね合わせて考えたり、データを分析したりするなど多面的・多角的に考察できるようにする。

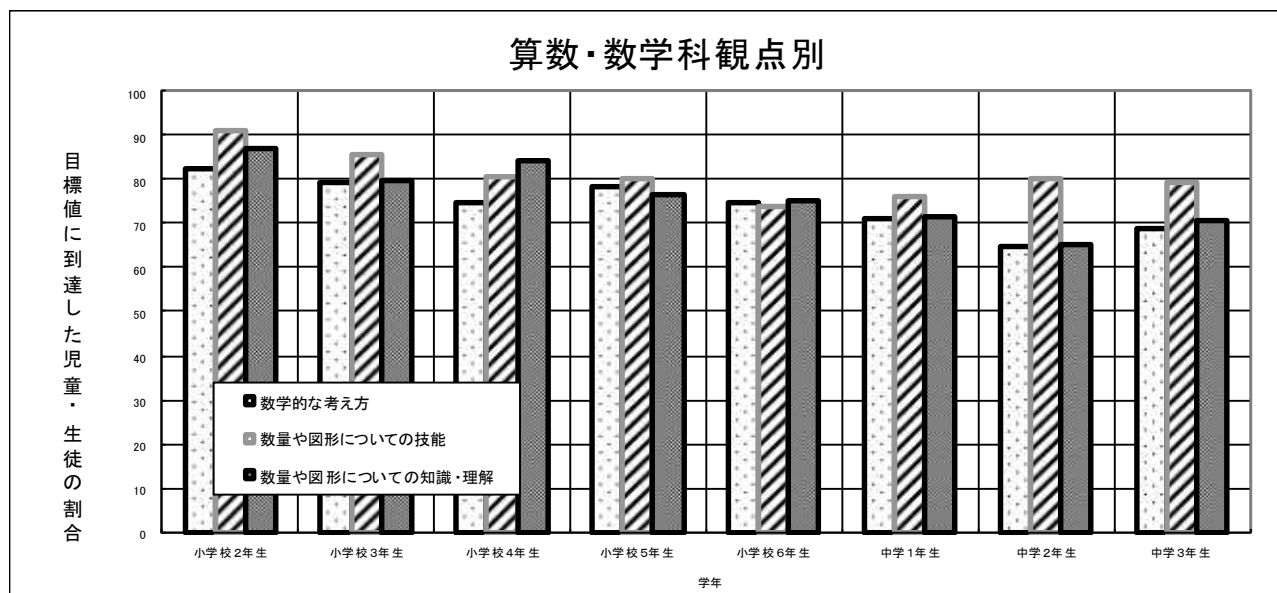
【参考】

		社会的な思考・判断・表現			観察・資料活用 of 技能			社会的な事象についての知識・理解		
年度		H30	H31	R2	H30	H31	R2	H30	H31	R2
小	6年生	74.1	72.7	75.0	72.8	69.4	69.8	64.6	62.4	59.4
中 学 校	1年生	61.9	64.0	64.4	69.1	69.2	73.1	58.6	60.1	60.8
	2年生	74.4	70.8	76.4	64.8	61.7	63.2	60.9	61.7	59.7
	3年生	69.5	69.4	74.0	67.0	66.6	71.5	68.1	66.9	73.1

※ 太字・斜体は、平成31年度を上回ったものを示している。

※ 網掛けの数値は目標値に到達した児童・生徒が70%以上の項目を示している。

(3) 算数・数学科



【調査結果の分析】⇒「数学的な見方・考え方を働かせて考察し、自分の考えを表現する力の育成」

◆結果

- ・小学校では、各観点とも目標値に到達した児童が70%以上であった。80%以上であった項目が前年度よりも7項目となった(2項目増)。中学校では、全学年とも目標値に到達した生徒が70%以上であった観点は「技能」のみであった。
- ・小学校の領域別では、70%を下回る領域が見られた(2年図形=2・4・6年生、量と測定=6年生、数量関係=6年生)。平均正答率は6年生の「数量関係」が特に低かった。中学校では、1・3年生はすべての領域で70%を上回った。2年生は「数と式」を除く3領域の達成率が70%を下回った。特に「資料の活用」の達成率が55.7%と低かった。

◆課題

- ・解答形式が記述の問題の無解答率は、全体的には改善傾向が見られるが、中学校で、無回答率25%を上回る問題がある。説明する問題の中でも、「正しいとはいえない」ことを説明するものの無解答率が高い。
- ・中学校1年生で学習する「資料の活用」の基礎的な内容が定着していない。用語の意味を正しく理解し、表現する際にその用語を活用できるように定着させること、データを読み取る力を付けることなどが必要である。

◆課題への対応

- ・全小・中学校で実施している習熟度別少人数指導において、学習集団の編成を適切に行い、児童・生徒一人ひとりの課題を把握し、個に応じた指導を充実することで、児童・生徒が自ら問題を解決しようとする意欲や能力を高める。
- ・間違いから学ぶ授業を展開したり、児童・生徒の豊かな発想を価値付けたりすることで、自分の考えを伝えようとする意欲や本当に正しいか多角的に考える力を高める。
- ・ICTを活用し、表やグラフなどのデータを分析したり、自分でグラフを作成する活動を取り入れた授業を行うことで、統計的な見方を鍛えるとともに、分析した結果を伝え合い、指摘し合う活動を通じて、多様な見方を身に付けさせる。

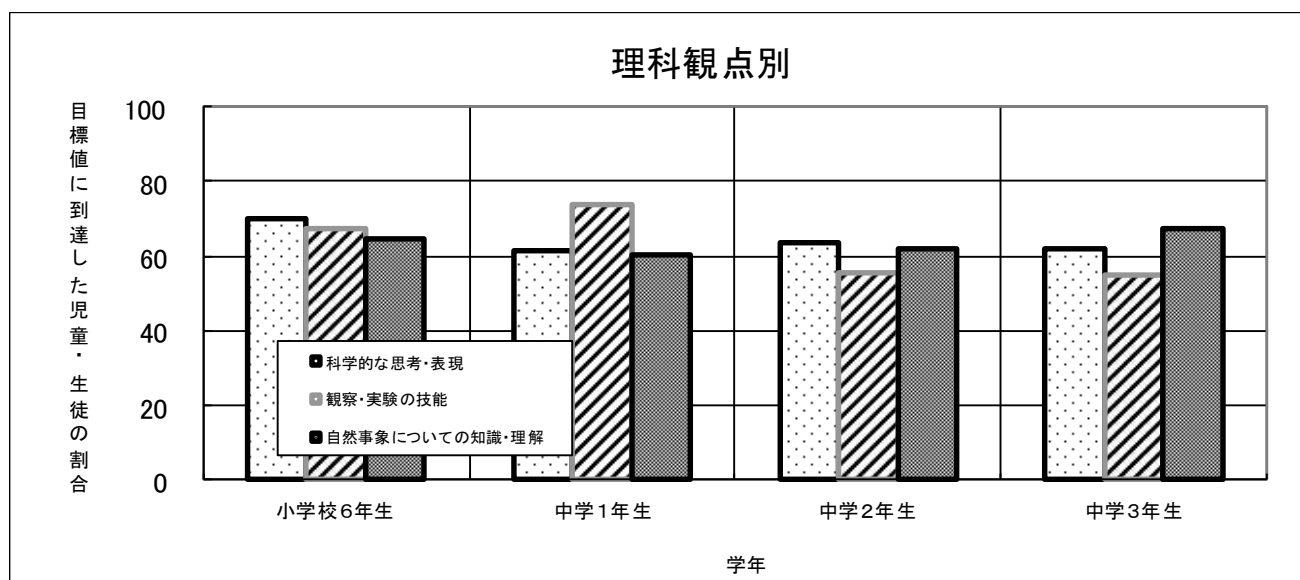
【参考】

	年度	数学的な考え方			数量や図形についての技能			数量や図形についての知識・理解		
		H30	H31	R2	H30	H31	R2	H30	H31	R2
小学校	2年生	75.9	75.7	82.6	86.6	86.0	91.3	83.3	81.6	86.8
	3年生	74.7	74.5	79.1	82.0	80.3	85.6	81.6	80.1	79.6
	4年生	78.7	78.2	74.7	79.6	79.1	80.6	85.3	83.4	84.2
	5年生	77.3	74.0	78.6	80.9	78.1	80.0	75.5	72.2	76.5
	6年生	76.3	75.9	74.8	76.8	76.7	73.8	77.3	76.4	75.4
中学校	1年生	68.5	68.4	71.2	70.6	71.8	76.1	70.0	72.0	71.4
	2年生	63.7	59.9	64.9	77.3	71.0	80.1	72.4	66.2	65.2
	3年生	70.5	71.2	69.0	75.3	74.7	79.3	70.2	68.4	70.5

※ 太字・斜体は、平成31年度を上回ったものを示している。

※ 網掛けの数値は目標値に到達した児童・生徒が70%以上の項目を示している。

(4) 理科



【調査結果の分析】⇒「科学的語句の意味の正しい理解と活用する力の育成」

◆結果

- ・小学校では、【科学的な思考・表現】の観点で、達成率が昨年度より上昇したが、達成率が7割を上回る項目はなかった。
- ・中学校では、9項目中5項目が昨年度より上昇し、1年生の【観察・実験の技能】の観点で達成率が7割を上回った。

◆課題

- ・小学校では、【地球領域】の「流れる水のはたらき」で正答率が目標値より大きく下回った。地球領域の学習で、写真等から実際の状況を空間的に想像したり、時代の変遷による時間的な変化などと関連付けて思考することに課題が見られた。
- ・中学校の【粒子領域】では、実際に目に見えない現象の理解で、誤答が正答より多い逆転が見られた。目に見えない現象をモデルをつかって考え、適切に表現することに課題がある。また、【エネルギー領域】では実験の結果を示すグラフから必要な数値を読み取って考察することに課題が見られた。
- ・小学校、中学校共に実験結果を正しく分析して解釈すること、既習の科学的語句を用いて表現することが課題である。

◆課題への対応

- ・理科室で確認できない現象や実際に観察することが難しい場合には、ICT機器を活用して動画を視聴するなど、指導を工夫する。また、モデル実験をタブレット等で撮影して、動画をくり返し視聴し、実際の地形と照らし合わせながら考察をする。
- ・粒子領域の目に見えない現象について、実験の結果から考察する過程で、考えたことを文章で表現するだけでなく、目に見えない粒子をモデルで表して説明することで、理解がより深まる。
- ・観察・実験の結果を正しく分析して解釈できるようになるには、実験の結果を予想や仮説と比較したり、今まで習得した知識・技能と関連付けて考えたりすることが大切である。様々な気付きを関連付けて、多面的に分析することで結果の正しい解釈ができる。
- ・科学的な語句の意味を正しく理解し、それらの語句を用いて実験結果をまとめたり、考察したりする学習を繰り返すことで、語句を確実に身に付け、学びを深めることができる。また、日常生活や社会との関連を図り、理科で学習した知識が深く関わっていることに気付くことで、理科を学ぶことの意義につながる。

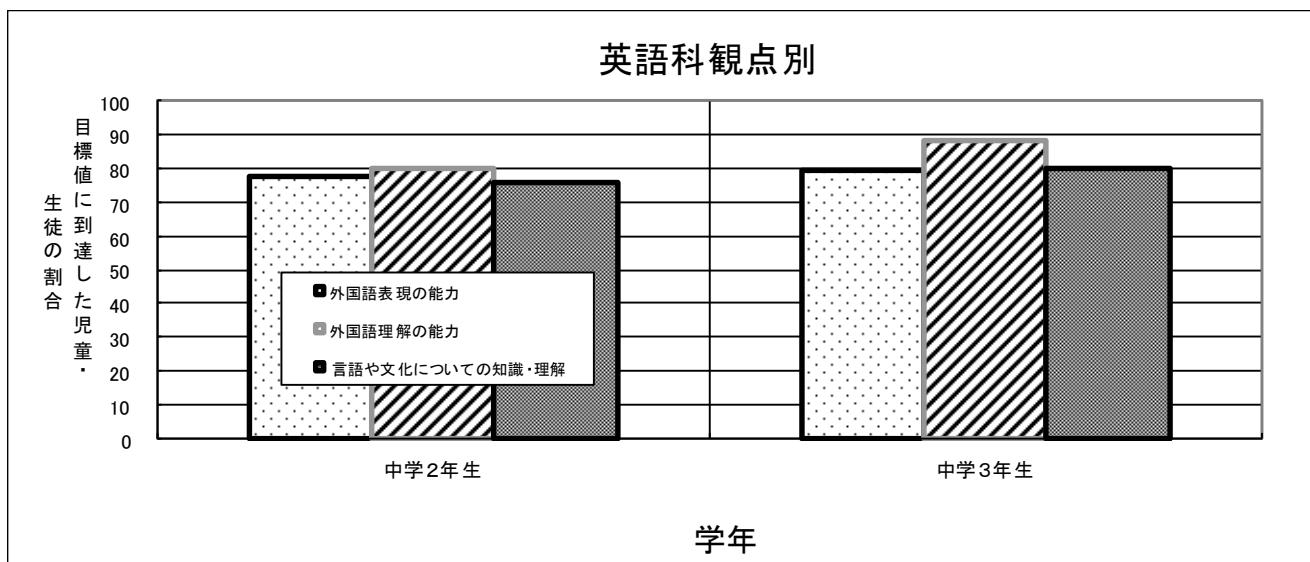
【参考】

		科学的な思考・表現			観察・実験の技能			自然事象についての知識・理解		
年度		H30	H31	R2	H30	H31	R2	H30	H31	R2
小	6年生	70.7	68.7	69.8	70.6	67.9	67.3	74.4	71.4	64.6
中学校	1年生	62.3	63.5	61.5	67.2	68.7	73.7	61.7	63.3	60.1
	2年生	62.4	64.5	63.7	62.6	56.5	55.3	53.1	53.4	61.7
	3年生	60.8	60.6	62.1	55.5	50.8	55.0	66.8	63.6	67.2

※ 太字・斜体は、平成31年度を上回ったものを示している。

※ 網掛けの数値は目標値に到達した児童・生徒が70%以上の項目を示している。

(5) 英語科



【調査結果の分析】⇒「英語で解答・表現する力の育成」

◆結果

・観点別達成率

2年生は各観点とも達成率が70%を上回っており、全観点で8～10ポイント増加した。

3年生は各観点とも70%を上回っており、全観点で5～7ポイント増加した。

・領域別達成率

「聞くこと」2年生 80.3%、3年生 88.9%（同一母集団経年比 23.1ポイント増）

「読むこと」2年生 71.6%、3年生 80.6%（同一母集団経年比 16.9ポイント増）

「書くこと」2年生 76.9%、3年生 82.4%（同一母集団経年比 15.1ポイント増）

2年生については、各領域とも達成率が70.0%を上回っている。

3年生については、同一母集団の経年比較において、各領域で格段の上昇が見られることから、言語活動を中心に据えた授業の成果が出ていると考えられる。

・2年生では、「外国語表現の能力」の観点において、「英語でたずねる文を書くことができる（交通手段をたずねる）」及び「言語や文化についての知識・理解」の観点において、「語形・語法を理解することができる（一般動詞過去の疑問文）」という問題の正答率が低かった。

・3年生でも同じく「外国語表現の能力」の観点において、「長文の内容に関する質問に英語で答えることができる」及び「英語でたずねる文を書くことができる。（相手に天気をたずねる）」という問題の正答率が低かった。

◆課題

・「英語でたずねる文を書く」や「相手の質問に英語で答える」など英語で解答・表現する力を育成する。

・生徒一人ひとりの習熟に応じた指導を行う必要がある。

◆課題への対応

・日々の授業において、パターンプラクティスやコミュニケーション活動を豊富に取り入れ、基礎的な学習内容の定着を図るとともに、重要表現をアウトプットさせ、日常的に活用させる。

・具体的な場面や状況に合った適切な表現を考えたり、話したりする言語活動の充実に加えて、英語を用いて書く学習活動を意図的・計画的に取り入れる。

・小学校の外国語及び外国語活動と中学校の英語との連携を図り、小・中学校の教員同士が共通理解の基に指導を行うことで、相乗効果を生み出せるようにする。

・オールイングリッシュによる授業を実施するとともに、教師やALTの使用する英語が生徒にとって効果的なインプットとなるよう工夫する。

・ICTを活用し、教科書の範読等をデジタル教科書で行い、教師が生徒の学習状況を把握しやすくすることで、一人ひとりの習熟に応じた指導を実践する。

【参考】

		外国語表現の能力			外国語理解の能力			言語や文化についての知識・理解		
年度		H30	H31	R2	H30	H31	R2	H30	H31	R2
中学校	2年生	74.4	67.7	77.5	75.4	69.8	80.0	73.7	67.7	75.7
	3年生	75.2	74.7	79.3	82.3	82.5	88.2	73.8	72.5	80.0

※ 太字・斜体は、平成31年度を上回ったものを示している。

※ 網掛けの数値は目標値に到達した児童・生徒が70%以上の項目を示している。